

『徒然草』を楽しむ  
ユマニスト兼好の人間洞察

ノートルダム女子大学現代人間学部

こども教育学科特任教授 渡邊春美

兼好法師像 (江戸期)



海北友雪「徒然草絵巻」

(サントリー美術館蔵)

## 目次

- 一 『徒然草』と兼好法師
- 二 心づかいの機微
- 三 人間へのまなざし
- 四 人間への洞察
- 五 ユマニスト兼好の問い

つれづれなるままに、日ぐらし、  
にむかひて、心にうつりゆくよし  
なしごとを、そこはかとなく書きつ  
くれば、あやしうこそものぐるほし  
けれ。

(序段)

# 一 『徒然草』と兼好法師

1 『徒然草』の成立？

2 兼好法師の略歴

① 詐称された兼好法師

② 新たな略歴の追究

3 兼好の人となり

① 問う人

② 博学多才

③ ユマニスト兼好

4 兼好のとらえた世界

① まことの大事

② 美意識としてのあはれ

# 『徒然草』の成立？

1 ◎成立を示す外部資料は無い。

橘 純一説

1 一三三〇年 ～ 一三三一年  
(元徳二年) (元弘元年)

本文中から執筆時点を推定できる記述に基づき考証。後醍醐天皇を「当代」とし、後宇多法皇を「故法皇」、花園上皇を「新院」と述べられる期間。

安良岡康作説―二部三段階

一部

2

(1) 一三一九(元応元)年、三段まで。

二部

(2) 一三三〇(元徳二)年までに大部分執筆。

(3) 一三三三(建武三)年頃、一部挿入

## 2 兼好法師の略歴

### ① 詐称された兼好法師

兼好法師の略歴

生没年 一二八三（弘安六）年誕生

生 一三五二（正平七）年ごろ没。

し）俗名 ト部兼好（うらべかねよし）  
吉田神社の神官 ト部兼顕の三男。

後 堀川具守に仕え、具守の娘の子、  
二条天皇の即位によつて、九歳

れ 二五歳の従五位下左兵衛佐に任ぜられ、

官をたがひし。翌年、後二条天皇が崩御し、  
らなし。いと後、修学院や比叡山横

川などに住んだが、東山あたりの本居は、  
山科小野庄とも洛西の仁和寺に近い。

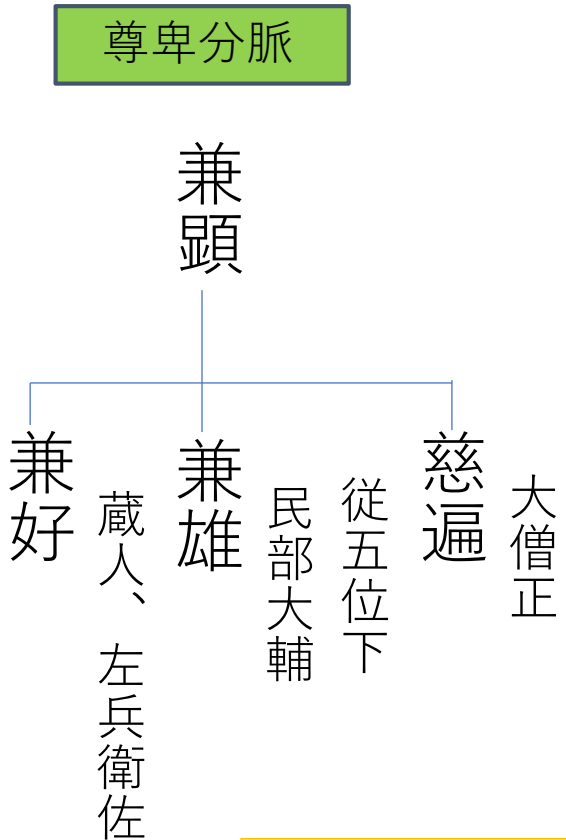
わかれ丘に住んだといふ。晩年は、  
双ヶ丘に住んだといふ。

運・和歌を二条為世に学び、頓阿・慶  
王と浄弁と並んで家集に『兼好法師

』がある。

集

## 2 | ② 新たな略歴の追究



以二俗名一為二法名一

南北朝期に作成された諸家の系図。後人の加除訂正のため、異本ごとに巻数・配列が異なる。

- ① 吉田神社の神官卜部兼顕の三男。
- ② 六位の藏人として天皇に仕えた。
- ③ 従五位下左兵衛佐に任ぜられた。

① 吉田家当主兼俱（一四三五〜一五一二）の捏造、慈遍とも血縁無し。

② 藏人の時期、鎌倉に長期滞在。また、「公家日記」に登場皆無。

③ 勅撰集の名前表記は、五位以上は俗名。兼好は六位以下の凡僧とされ、「兼好法師」と表記。

（小川剛生『兼好法師 徒然草に記されなかった  
真実』二〇一七年二月 中央公論社）

### 3 兼好の人となり

#### ① 問う人

八つになりし年、父に問ひて云はく、「仏は如何なるものにか候ふらん」といふ。父が云はく、「仏には人の成りたるなり」と。

また問ふ、「人は何として仏にはなり候ふやらん」と。父また、「仏の教によりて成るなり」と答ふ。

(中略)

また問ふ、「その教へ始め候ひける、第一の仏は、如何なる仏にか候ひける」といふ時、父、「空よりや降りけん、土よりや湧きけん」と言ひて、笑ふ。

「問ひつめられて、え答へずなり侍りつ」と諸人にかたりて興じき。

(二四三段)

### 3 — ② 博学多才

#### 兼好の自讃

花見の折、最勝光院の辺で、馬を走らせるのを見て、次に走らせれば、落ちると予言。的中した。

1 論語の「紫の朱奪ふことを悪む」の出所不明で困っているのを見て、2 九巻にあると教え、喜ばれた。

常在光院における釣鐘の、在兼卿作の銘文に「花外送夕、声聞百里」3 とあった。その韻の誤りを指摘。

横川の常行堂に「龍華韻」と書かれた額があった。手は左理か行成か4 不明。行成なら裏書ありと指摘。

那蘭陀寺で道眼上人が法話をした時、「八災」を忘れた。誰も言えな5 かったが、兼好が答えた。

後七日御修法の内裏の加持香水の儀に出た頭助僧正の退出時、はぐれ6 た僧都を人混みに探し出した。

千本釈迦堂参詣の折、容姿や薫りが優雅な女が膝に寄りかかってきたので7 立ち去った。ある人の謀に陥らず、笑われずに済んだ。  
(二三八段)



# 3 — ③ ユマニスト兼

好

ユマニスト

(1) 博愛的、人道的な人



(2) フランスルネサンス期のエラスムスに代表される、人間らしさを問い求め、本質を問い求める考え方、態度を身につけた人。本質的なところから「人間世界のいっさいの事象に対して批判、要請する力」、本質を問う力を身につけた人。

(渡辺一夫『ヒューマニズムであること』—

九七三年 講談社 参照)  
ム考

# 兼好のとらえた世界

## ① まことの大事

4

たの生住異滅のうつつりかはるまこと  
だが大事はしたけき河のみなぎり流る  
ち如しは。ひばしものこほらず  
に行。ゆくもなり。ほら

秋の春暮れてのち夏になり  
秋の気来るにはあらなり  
はすを催しは夏より既に春は夏果て  
天はすなはち寒くなりり秋は通ひ夏  
ぬ木気。の葉も青くも梅もつぼみ春  
芽ぐむ。にはあ落つるもより萌しつは  
るに堪へずして落つるなりり萌しつは

れに過ぎたり。の移り来ること、またこ  
ついであがり。死期はついで待たず。  
死は前よりし。死来らず。かをねて後ろ  
に迫り。人皆死あらず。こをねて後ろ  
待つ。これとり。し。かも急なるに、  
えづ。磯よ。潮の満つるが如し。なれど  
も、五段)

4 — ②美意識としてのあはれ

見花は盛りに、月はくまなきをのみ、  
 見るもこのかき、  
 垂れぬも恋、  
 なほあはれに、  
 ほあはれに、  
 情を深し、  
 春の行方知ぬも、  
 咲きぬべきほ、  
 庭などこそ、  
 多し散れり、  
 中略）

かよろづのことも、始め終りこそを  
 逢ひ見れば、男も情のけも、  
 やみしるを、言ふひ、あだなる契り  
 をかこち、憂さを思ひ、  
 遠き雲井を、思ひ、  
 を遠き雲井を、思ひ、  
 色好むとは、言はぬに昔

めでたがるよくりも、なきを千里の外まで眺  
 木の間、深き山、の杉の梢に見えたるやう  
 隠れ、影、まうち、のしぐ、あはれむら雲  
 椎柴の、白、櫛、ど、ま、た、濡、れ、る、よ、う、な、る  
 葉の、上、に、き、あら、め、む、き、た、る、こ、そ、と、身、に、沁、る  
 恋、し、う、覚、ゆ、れ、ら、む、友、も、が、な、と、都

(一三七段)

— ②美意識としてのあはれ

4  
花は盛りに、月はくまなき

1  
雨にむかひて月を恋ひ、  
垂れこめて春の行方知らぬも、  
咲きぬべきほどの梢、散りしを  
れたる庭などこそ、

あはれに情深し。見所多けれ。

男女の情けも、ひとへに逢ひ見  
るをば言ふものかは。

2  
逢はでやみにし憂さを思ひ、あ  
だなる契りをかこち、長き夜を  
ひとり明かし、遠き雲井を思ひ  
やり、浅茅が宿に昔を偲ぶこそ、

よろづのことも、始め終りこそを  
かしけれ。  
色好むとは言はめ。

— ② 美意識としてのあはれ

4

望月のくまなきを千里の外まで  
眺めたるよりも、

3

暁近くなりて待ち出でたるが、  
いと心深う青みたるやうにて、  
深き山の杉の梢に見えたる、木  
の間の影、  
うちしぐれたるむら雲隠れのほ  
ど、椎柴・白樫などの濡れたる  
ようなる葉の上にきらめきたる  
こそ、

またなくあはれなり。

身に沁みて、「心あらむ友もが  
な」と、都恋しう覚ゆれ。

## 二 心づかいの機微

1 心を思いやる

— 人情の機微

2 時候のあいさつ

— ものの趣の感受

3 見送る心

— 余情の美しさ

# 時候のあいさつ —ものの趣の感受

1

雪のおもしろう降りたりし朝、人がり、言ふべきことありて、文をやるとて、雪のこと、何とも言はず、めし返事に「この雪、いかが見ると、一筆載せたまはぬほどの、ひがひがしからん人の仰せらるること、聞き入るべきかは。返々、口惜しき御心なり」と言ひたりしこそ、をかしかりしか。

今は亡き人なれば、かばかりのことも忘れがたし。(三一段)

雪は自然美の代表。

「今は亡き人」は、雪の朝の感興を分かち合いたいとする思いが叶わなかったことを遺憾とする。ものの趣を深く感受する「今は亡き人」への深い愛惜の念がある。

## 2 心を思いやる

### — 人情の機微

「久しくおとづれぬころ、いかばかり恨むらむと、我が怠り思ひ知られて、言葉なき心地するに、女のかたより、『仕丁やある。ひとり』など言ひおこせたるこそ、ありがたうれしけれ。さる心ざましたる人ぞよき」と人の申し侍りし、さもあるべきことなり。(三六段)

人情の機微をとらえて声をかけた女性の賢明さ



# 見送る心

## — 余情の美しさ

3

九月廿日のころ、ある人に誘はれ  
たてまつりて、明くるまで月見歩く  
こと侍りしに、思し出づる所ありて、  
案内せさせて入り給ひぬ。荒れたる  
庭の露しげきに、わざとならぬ匂ひ、  
しめやかにうちかをりて、忍びたる  
けはひ、いともものあはれなり。

よきほどにて出で給ひぬれど、な  
ほことざまの優に覚えて、物の隠れ  
よりしばし見みたるに、妻戸をいま  
少し押しあけて、月見るけしきなり。

やがてかけこもらましかば、くち  
をしかからまし。あとまで見る人あり  
とはいかでか知らん。かやうのこと  
は、ただ朝夕の心づかひによるべし。  
その人、ほどなく失せにけりと聞き  
侍りし。(三二段)

余情・余韻に浸る行為Ⅱ美的行為  
残心（後の茶道・武芸）

# 三 人間へのまなざし

1 理不尽な飲酒の光景

— 観る目と筆の力

2 耳を傾ける兼好

— 心の隙の危うさ

3 愛すべき愚直

— 導く人の必要性

憎た身たりづらちりもかく人思  
 するをる出かぬ笑 覚か もひ人  
 °を肩法しら人ひまえげ鳥 入の  
 (ぬ師てもは ばずて帽思り上  
 一興ぎ召 食 杯ゆ ° 子ふたに  
 七じてしおひ肴持か女用ゆ所るて  
 五見 出のた取てらは意がなさ見  
 段る目さおるりるず額なみくまた  
 )人もれの て手 髪き 笑にる  
 さあて歌さ口に顔は気紐ひ 〃  
 へて ひまに取うれ色はの心こ  
 ら黒舞あさりちら づのにと  
 うれくひししつさか日ししくに  
 とずき 〃°あきさに頃 りし心  
 ますた年声て げ搔の脛 と憂  
 しぢな老の よてき人高詞見し  
 くりきい限りかうやとく多し °

れ大こしめ逃ひ ゆ飲あ  
 伏事がきてげそ飲 ゑまる世  
 すのま人 むめむ とせこに  
 °病しもすと 人 もたとは  
 (者く ずす人の 心るに心  
 中と たろる目 得をは得  
 略な息ちにをを顔 ず興 ぬ  
 )り災ま飲 はい °とまこ  
 てなちまとかと ずづと  
 るにせらり堪 る酒の  
 前人狂つへてへ こを多  
 後も人れて捨が と働き  
 も とば てた めな  
 知目な 引んげ いてり  
 らのりうきとに か 〃°  
 ず前てるとし眉 な強と  
 倒にをはど を るひも

1

理不尽な飲酒の光景  
 — 観る目と筆の力

1

理不尽な飲酒の光景  
— 観る目と筆の力



海北友雪「徒然草絵巻」 (サントリー美術館蔵)

## 耳を傾ける兼好

### — 心の隙の危うさ

2

高名の木登りといひしをのこ、人を掟てて、高き木に登せて梢を切らせしに、いと危く見えしほどは言ふこともなくて、降るときに、軒長ばかりになりて、「誤ちすな。心して降りよ」と言葉を懸け侍りしを、「かばかりになりては、飛び降るるとも降りなん。いかにかく言ふぞ」と申し侍りしかば、「そのことに候。目くるめき、枝危きほどは、おのれがおそれ侍れば申さず。誤ちは、やすき所になりて、必ず仕ることに候」と言ふ。

あやしき下臆なれども、聖人の戒めにかなへり。鞠も、かたき所を蹴出だして後、やすく思へば、必ず落つと侍るやらん。(一〇九段)

# 愛すべき愚直

## — 導く人の必要性

3 仁和寺にある法師、年寄るまで石清水を拝まざりければ、心憂く覚え、ある時思ひ立ちて、ただひとり徒歩より詣でけり。極樂寺・高良などを拝みて、かばかりと心得て歸りにけり。

さて、かたへの人にあひて、「年ごろ思ひつる事果し侍りぬ。聞きしにも過ぎて尊くこそおはしけれ。そも、参りたる人ごとに山へのぼりしは、何事かありけむ、ゆかしかりしかど、神へ参るこそ本意なれと思ひて、山までは見ず。」とぞ言ひける。少しのことにも、先達はあらまほしきことなり。(第五二段)

神仏混淆・本地垂迹

老法師の滑稽なひとりよがりぶりが露呈。終りの言葉は、短小ではあるが、寸鉄人を刺す辛辣さを含んでいて、老法師の失敗ぶりを、単なる説話にとどめず、随筆的世界へ発展させている。(安良岡康作『徒然草全注釈 上巻』一九六二年 角川書店 二四二頁参照)

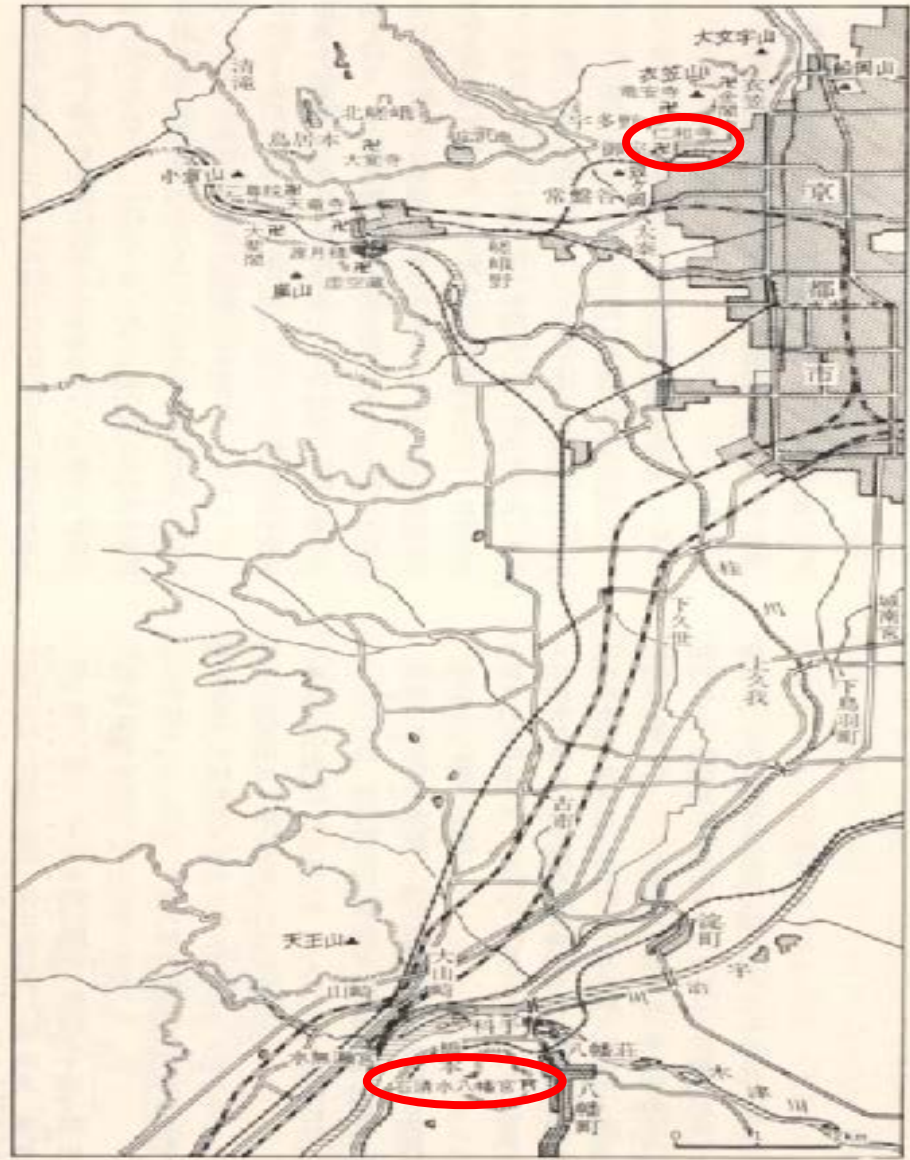


3

# 愛すべき愚直 — 導く人の必要性



石清水八幡宮(『都名所図絵』)



(安良岡康作 『徒然草全注釈 上巻』  
一九六七年 角川書店 二四三頁)

## 四 人間への洞察

1 心は事に触れて生じる

2 心にきざす恐怖

—うわさの心理

3 人を損なうもの

—支配される人間



# 心は事に触れて生じる

1 神無月のころ、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里にたづね入ること侍りしに、遙かなる苔の細道をふみ分けて、心ぼそく住みなしたる庵あり。木の葉に埋もるる懸樋のしづくならでは、つゆおとなふものなし。閑伽棚に、菊・紅葉など折り散らしたる、さすがに住む人のあればなるべし。

かくてもあられるよと、あはれに見るほどに、かなたの庭に、大きな柑子の木の、枝もたわわになりたるが、まはりをきびしく囲ひたりしこそ、少しことさめて、この**囲ひ**なからましかばと覚えしか。

柑子の木

欲望

(一一一段)

心は縁にひかれて移るもの (五八段)  
心は必ず事に触れて来る (一五七段)

## 心にきざす恐怖 —うわさの心理

2

「奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる」  
「山ならねども、これらにも、猫の経あがりて、猫またになりて、人とすることはあなるものを」

「一人ありかむ身は心すべきこととにこそ。」  
恐怖の増幅

ある所にて、夜ふくるまで連歌して、たゞ一人かへりけるに、

なに阿弥陀仏

(連歌しける法師の、行願寺の邊に在住)

小川の端にて、音に聞きし猫また、あやまたず足もとへふと寄り来て、やがてかきつくまゝに、頸のほどを食はんとす。

肝心もうせ、防ぐ力もなく、足も立たず、小川へ転び入り、助けを求める。

飼ひける犬の、暗けれど主を知りて、飛び付きたりけるとぞ。(八九段)

## 人を損なうもの — 支配される人間

3

その物に付きて、その物を費しそ  
こなふ物、必ずあり。身に虱あり。  
家に鼠あり。國に賊あり。小人に財  
あり。君子に仁義あり。僧に法あり。

(九七段)

天下は尽く殉ずるなり。彼れ其の殉ず  
る所仁義なれば、則ち俗は之を君子と  
謂ひ、其の殉ずる所貨財なれば、則ち  
小人と謂ふ。(『莊子』駢拇篇)

私たち人間は、わたしたち自身が、利  
便のために、よかれと思つてつくつた  
もの(機械・思想・制度など)をりっ  
ぱに使つてこそ、それらをつくりだし  
た目的も達せられますのに、ともすれ  
ば、わたしたちは、自分のつくつたも  
のに使われ、その機械となり、奴隸と  
なっているばあいがあるように思いま  
す。(渡辺一夫『ヒューマニズム考  
人間であること』一九七三年 講談社  
一八三頁)

ユマニスト兼好の問い

五

1 信仰を問う

2 怪しまざる力

3 迷妄を退ける

## 信仰を問う

1西大寺静然上人、腰屈まり眉白く、まことに徳たけたる有様にて、内裏へ参られたりけるを、西園寺内大臣殿、「あなたふとけしきや」とて信仰の気色ありければ、資朝卿これを見て、「年の寄りたるに候」と申されけり。

後日に、むく犬のあさましく老いさらぼひて、毛剥げたるをひかせて、「このけしきたふとく見えて候」とて、内府へ進らせられたりけるとぞ。

(一五二段)

○内大臣という権威をもともせず、外見から人間を判断すると見た実衡の俗見に、痛烈な批判を浴びせかけた資朝の強烈な性格。

○内大臣の信仰が、なんの正体もない虚像にすぎないことをも同時に暴き出している。

(永積安明『徒然草を読む』一九八二年  
岩波新書 八四頁)

聖海上人の感涙いたづらになりにけり。

(二三六段)

## 怪しまざる力

2 徳大寺故大臣殿、檢非違使の別当のとき、中門にて使庁の評定行はれけるほどに、官人章兼が牛はなれて、庁のうちへ入りて、大理の座の浜床の上に登りて、にれうちかみて臥したりけり。重き怪異なりとて、牛を陰陽師のもとへつかはすべきよし、おのおの申しけるを、父の相国聞き給ひて、「牛に分別なし、足あらば、いづくへか登らざらん。尪弱（おうじやく）の官人、たまたま出仕の微牛を取らるべきやうなし」とて、牛をば主に返して、臥したりける置をばかへられにけり。あへて凶事なかりけるとなん。

「怪しみを見て怪しまざる時は、怪しみかへりて破る」と言へり。

（二一〇六段）

怪しみを怪しまざる力

合理的に考える力

## 迷妄を退ける

3 龜山殿建てられむとて、地を引かれけるに、大きな蛇、數もしらず凝り集りたる塚ありけり。「この所の神なり」と言ひて、このよしを申しければ、「いかがあるべき」と勅問ありけるに、「古くよりこの地を占めたる物ならば、さうなく掘り捨てられがたし」と皆人申されけるに、「この大臣一人、王土にをらん虫、皇居を建てられんに、何の祟りをかなすべき。鬼神はよこしまなし、咎むべからず。唯皆掘り捨つべし」と申されたりければ、塚を崩して、蛇をば大井川に流してけり。  
さらに祟りなかりけり。

(二一〇七段)

怪異や神靈のたたりへの畏怖。実基の大臣は、その迷妄を躊躇なく断固として否定。ここには、合理的で現実的な行動によって、因習を突き破ってゆこうとする人間の、自信にみちたういういしい精神がはりつめている。  
(永積安明『徒然草を読む』一九八二年 岩波新書 九九頁参照)

# 参考文献

- ・小川剛生訳注『新版 徒然草』（二〇一五年 角川書店）
- ・小川剛生『兼好法師 徒然草に記されなかった真実』二〇一七年 中央公論社）
- ・永積安明『徒然草を読む』（一九八二年 岩波書店）
- ・神田秀夫・永積安明・安良岡康作訳注『方丈記 徒然草 正法眼蔵随聞記 新編日本古典文学全集44』（一九九五年 小学館）
- ・木藤才蔵校注『新潮日本古典集成徒然草』（一九七七年 新潮社）
- ・佐竹昭広他編『新日本古典文学大系39 方丈記／徒然草』（一九八九年 岩波書店）
- ・島内裕子校訂・訳『徒然草』（二〇一〇年 筑摩書房）
- ・三木紀人『徒然草（一～四）全訳注』（一九七九・一九八二年 講談社）
- ・安良岡康作『徒然草全注釈 上下巻』（一九六七・一九六八年 角川書店）
- ・長谷川孝士監修・吉田兼好・柳川創造シナリオ・古城武司漫画『わたしたちの古典8 新装版 徒然草』一九九八年一月 学校図書 二二頁）



## ごあいさつ

本日は、お忙しいところ、本、公開講座「『徒然草』を楽しむユマニスト兼好の人間洞察」に、足をお運びくださり、ありがとうございます。

拙い話を最後までお聞きくださいましたことに、深く感謝申し上げます。

これを機会に、『徒然草』ならびに、古典文学を、さらにお楽しみいただければ、幸いです。どうぞ、気をつけて、お帰りにくださいますように。

渡邊 春美